

私にも
言わせて!
第96回

初心に帰る

国際協力も足元から…日本の農村、
そして子どもたちの暮らしを支えるために



山形県最上総合支庁
医療監(兼)最上保健所長
鈴木 恵美子

山形県出身。東京大学農学部農業
経済学科を卒業後、平成14年に
富山医科薬科大学(現富山大学)医
学部卒業。18年より山形県立中
央病院小児科。30年4月より、行
政医師として同県村山保健所へ異
動。令和2年4月より現職。小児
科専門医、日本医師会認定産業医。

行政医師3年目のこの4月、初めて保健所長の命を受けました。公衆衛生について確固たる信念を語れるほどの経験値にはまだ欠けませんが、この半年特に印象深い日々を送り、これまでの道を振り返りつつ「農村」と「子ども」が自分の軸なのだと思改めて初心に帰っています。

きっかけは医療的ケア児

「保健所の仕事に興味はありませんか?『医療的ケア児』のことに取り組める小児科医を探しているのですが」。3月も終わろうとしていたとある日の夕方、勤務先の医局前の廊下で声を掛けていただいたのが事の始まりでした。相手は、4月から保健所長として転出予定の呼吸器内科の先生でした。市中病院の小児科での臨床に十分なやりがいを感じていた自分にとつて、それは思いがけない出来事でした。そこから半年余り、先輩方のお話を伺いながら考えに考え、秋も深まるころに正式に転向の意思を固

め、平成30年4月より山形県村山保健所にて行政医師としての第一歩を踏み出しました。

医師になるまで

今となつては反省しきりですが、18歳当時の私は、明確な職業像を描けないまま「国際協力」や「アジアやアフリカの恵まれない子どもたちのために」といったイメージのみで進学してしまいました。幸いにも農業経済学科の「開発経済学」という分野で居場所を見つけ、恩師、友人、先輩にも恵まれ、タイ西部の孤児院へボランティアに出掛けたり、医学部保健学科の国際保健ゼミに混ぜていただいたりする中で、かつ

的ケア児とその家族が当たり前の暮らしを送れる制度ができないと事態は変わらぬ」という限界を感じ始めていました。まさにそんな時に、保健所の仕事と出合ったのです。背景には、平成28年の児童福祉法の改正がありました。

また、自分自身の子育てでの経験も背中を押しました。予期せぬ神経疾患を経験した長男、時期を同じくして先天疾患でNICUから旅立った次男と、私自身が医療的ケア児の親として今を生きていたかもしれない、とても人ごととは思えなかったのです。診療や二次救急は代わってくれる後輩たちがたくさんいるが、この仕事は自分に与えられた使命なのだろう。行政医師として、県内の大勢の子どもたちの暮らしを変えるということが、私の新しい目標となりました。

保健所へ

初めの2年間は、医務主幹という自由な立場で、また社会医学系専門医研修の専攻医として、指導医である所長の下で多くの経験を積ませていただきました。毎日聞き耳を立て、食中毒や感染症、精

て自ら蓋をした、手に職をつけて活動したいという思いが湧き上がってきました。当時の私の中ではまさに「公衆衛生イコール国際保健」というイメージが固まっております。「保健所医師」までは、まったく思いが至りませんでした。そして数年後、富山県で、二度目の学生生活をスタートさせました。

小児科医として見えてきた
臨床現場の境界

卒後は小児医療、先天性心疾患、外科的手技の習得などを考慮して母校の心臓血管外科に入局し、小児科や麻酔の研修も積ませてもらいました。やがてUターンのご縁があり、医局を離れ郷里である山形県の県立中央病院に小児科医として入職しました。一小児科医として、小児循環器診療に携わりつつ地域の二次救急を守るという日々は、忙しいながらも充実しており、

に追われました。そして迎えた4月1日、新米所長として最上保健所へとやってきました。山形市から約70km、新庄市をはじめとする1市4町3村からなる管内の人口は約7万人、総合支庁の一角に居を構え、職員数52人、保健師7人中感染症担当は2人のみです。県内では3月30日、31日に県内1例目、2例目の感染事例が相次いで確認されたばかりで、管内に至つては3月までのPCR検査自体も数えるほどでした。それが赴任当日の夕方、事態が一転します。管内第1例目の事例が発生し、さらに高齢者施設内へと波及したのです。職員の顔も名前も職種も一致しないまま走り出し、前任地で一緒だった職員を頼りに事態を把握し、部内のみならず本庁や管内市町村からの応援や地元医療機関の力を借りて、どうにか乗り切ることができました。感謝してもしきれません。

2年半で学んだこと

月並みですが、保健所内での各領域の専門家による多職種連携の素晴らしさを実感しています。中

国際協力の夢もいつしか忘れてしまふほどでした。

新生児医療の進歩とともに、新生児集中治療室(NICU)などから退院する医療的ケア児たちが徐々に増えていきました。その日々の中で、NICU卒業生たちの救急受診や入院対応を担いながら気付いたことがあります。ケア児が熱を出すたび、痰が膿性になるたびに、山を幾つも越え何時間もかけて受診に来る親子。疲れ果てた表情のお母さんのセーターやズボンには、無数の毛玉や穴が見て取れました。この子のケアに加え、同胞の子育て、義父母の介護、一切切の家事を一人でこなし、自分のことに構う暇もないでしょう。入院付添中だけでもゆつくり休んでいつてほしいと思ったのは一度や二度ではありません。そして、「個々の患者さんに夜を徹して全力を尽くしても自己満足にすぎない。医療

でも保健師の皆さんの献身と強さは、事前に聞いていた以上のものなりました。また臨床時代は忙殺されながらもその場で答えが出るぶん心理的には救われていたのに対し、行政医師は、目標設定が難しく成果もすぐには見えないため時にもどかしさも覚えます。しかし取り組みが形になったときの充実感は大で、それこそがやりがいと言えるでしょう。産業医としての立場も加わり、職員の過重労働の軽減という課題も見えてきました。

これからが始まり

中断していた通常業務も、6月以降順次再開されてきています。COVID-19対応は臨床寄りですが、いわば慣れた業務でしたが、行政医としての本格的な始動はこれからです。最上地域は小規模なぶん市町村や医療機関との連携が非常に密で、強固な信頼関係を築けることが強みです。地域の人々がより良い暮らしを実現できるよつと、与えていただいた機会を十分に生かしながら、自分自身の「農村」と「子ども」という初心と軸を忘れずに精進してまいります。

保健所長就任当日の
COVID-19第1例目から
施設内発生へ

帰国後、業務は一気にCOVID-19一色となり、相談・検査業務対応や県内の患者発生への準備